

古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(7)

安 藤 充

キーワード：古ジャワ語、Sārasamuccaya、マハーバーラタ

本誌連載の前6編¹⁾に続き、Sārasamuccaya の第251偈から第300偈（サンスクリット語）およびその解説（古ジャワ語）のテキストをローマ字転写し、それぞれの日本語訳を提示する。あわせて、サンスクリット偈の典拠や異読に関する情報、翻訳や解釈に関わる問題点などを注に記していく。

251.

sa ca śocati nāpy enaṃ svavīryam apakarṣati /

śriyā hīno 'pi yo gehe taveti pratipadyate //²⁾

財は乏しくとも、家でそなたのためにと労をとり、

自らの精力を弱らせても、(父親は) 彼 (息子) のことを嘆き悲しむことはない³⁾。

kunañ ikañ anak / gumawe tuhan i bapa ya tuwi / tan kadi wlas ni bapa / wlas nika ri bapa / apan

yadyapin daridrā ikañ bapa / amrih-mrih juga ya pawehanya ry anaknya //

子が父親を師と崇めるとしても、(子の) 父親に対する思いは父親ほどではない。なぜなら、父親はたとえひもじかろうとも、なんとかして子にものを与えようとするものだから。

252.

putrapautropapanno 'pi jananīm yaḥ samāśritah /

apī varṣasatasyānte vihāyasy eṣa vartate //⁴⁾

子や孫を授かろうとも母親を抛り所にする者は、

百年生きた後に天界で暮らす。

ikañ wwañ tēka riñ pānakan / paputwan / ndātan sah lawan sañ ibu / wet niñ bhaktinyan pakādi ñ
dewa sira / kadīrghāyuṣan mwañ svargapada phala nika //

子をもうけ孫を授かるほどになっても、神様を第一として信心厚いゆえに、母親との縁を切ることがない者には、その結果として長寿と天界が与えられる。

253.

tadā 'samṛddho bhavati tadā bhavati duḥkhiṭaḥ /
tadā śūnyaṃ jagat sarvaṃ yadā mātṛā viyuḥyate //⁵⁾

母親を失えば、富み栄えることはなく、苦悩し、世界のすべてが虚しくなる。

kunañ ikañ iniñgatan de ni ibunya / makahetu pratikūlanya / ya ika daridra ñaranya / ya ika
anēmu duhkha ñaranya / ya ika gumawe śūnya niñ rāt ñaranya //

母親と別れることは、反対のことを生み出す。貧しくなり、苦悩を招き、また、世界の空虚を生み出すと言われる。

254.

abhivādayeta vṛddham āsanam cāsya darśayet /
kṛtāñjalir upāsita gacchantam pṛṣṭhato 'nviyāt //⁶⁾

老いたる方を恭しくお迎えし、座席をお示しすべきである。

合掌して近くに侍り、出立の折は後ろから付き従うべきである。

matañnyan mañke ulaha riñ wwañ matuha / manāntwā swāgatā awehōngwan-uñgwan /
manēmbaha aśīlā añharēpakēna / yar añkat mañtērakēna //

年配者には次のように振る舞うべきである。歓迎の言葉で丁重にお迎えし、場を設えなさい。合掌して礼節正しくお仕えしなさい。お発ちのときは付き従いなさい。

255.

ūrdhvaṃ prāṇā utkrāmanti yūnaḥ sthavira āyati /
pratyutthānābhvādābhyāṃ punas tām pratipadyate //⁷⁾

年寄りが近づくと、若者の生気が上へと抜ける。

起立と挨拶とにより、それらを回復する。

apan alwañ hurip nikañ rare yan pinaran iñ atuha / yatnā pwa ñ rare manuṣsuñ mañabhiwāda /
manēmbah / maluy ta hurip nika //

老人が近くに来ると若者の生命力が弱まるので、若者は努めて（老人を）歓迎し、丁重

に挨拶し、合掌しなさい。(そうすれば) 生命力は戻ってくる。

256.

abhivādanaśīlasya nityaṃ vṛddhopasevinaḥ /
catvāri tasya vardhante kīrtir āyur yaśo balam //⁸⁾

挨拶をならいとし、常に年寄りに仕える者には、
称賛、寿命、名誉、力の4つが増大する。

kunēn phala niṅ kabhaktin riṅ wwaṅ atuha / pāt ikaṅ vṛddhi / pratyekanya / kīrti / āyuṣa / bala /
yaśa / kīrti naran in pālēman riṅ hayu / āyuṣa naran in hurip / bala naran in kaśaktin / yaśa naran
in patitingal rahayu / yatikāwuwuh paripūrṇa / phala niṅ kabhaktin riṅ wwaṅ atuha //

老人を大切にすることの結果として、4つのものが増える。一つずつ挙げれば、称賛、寿命、
力、名誉⁹⁾である。称賛とは、善行への称賛である。寿命とはいのちのことである。力
とは強さのことである。名誉とは、美德を後に残すことである。この4つのものが増える
、つまり完全に満たされる。これが老人を大切にすることの結果である。

257.

vayasah karmaṇo 'rthasya śrutasyābhijānasya ca /
veṣavāgbuddhisārūpyam anumattasya lakṣaṇam //¹⁰⁾

年齢、職、富、学識、家柄にふさわしい
服装、言葉、判断をすること、それがまっとうな人の印である。

nyaṅ keṅētakēna / wuwuh niṅ śarīra / nā n¹¹⁾ bāla / yowana / vṛddhi / yatika patūtakēna lawan
ikaṅ yoga ulahnya / ri tēlasnyātūt / muwah ta ya patūtakēna lawan piraskanya / māsnya /
sakārya siddhākēnanya kunaṅ / ika ta anuṅ asamhawa¹²⁾ atūta lawan janmanya ta ya / patūt nika
ya ta lawan de niṅ ahyas / de niṅ anaṅḍaṅ / de niṅ aṅucapa / mwaṅ de niṅ amāwāmbēk / patūt
nika kabeh / yatika lakṣaṇa niṅ atēñö naranya //

さて次のことに留意しなければならない。身体の成長、たとえば、子供、若者、年寄
り。ひとの行動はそれぞれに適したものに合わせなければならない。(年齢に) 合わせ
た後には、さらに、富、すなわち財力に合わせなければならない。すべての行為をその
ように成し遂げなければならない。家柄にも合わせなければならない。見合った服装、
見合った行動、見合った発言、見合った心の持ち様、すべてがふさわしくあるべきであ
る。これがきちんとした人の特徴である。

258.

viṣaṅgaṃ dīnam āvignaṃ kṣudhārtaṃ vyādhipīḍitam /
hṛtasvaṃ vyasanārtaṃ ca nityam āśvāsayaṃ naraḥ //¹³⁾

悲しむ人、落胆する人、戸惑う人、飢えにあえぐ人、病に苦しむ人、
財を奪われた人、別れが辛い人を、常に慰めるべきである。

lwir niñ wodhanan¹⁴⁾ / wwañ añel / sinakitan kunañ / wwañ hīna dīna daridara / wwañ hana
katakutnya / wwañ alapā¹⁵⁾ / wwañ wyādhi mañhiḍēp lara kunañ / wwañ inalap dṛbyanya /
rinampas / inahal / salwir niñ kahilañan / wwañ anēmu dukkha prihati / samañkana pratyeka niñ
wodhanan / āśwāsān¹⁶⁾ buddhinya //

慰められるべきはこのような人々である。疲れている人、痛みのある人、弱々しく憐れ
で貧しい人、恐怖に怯える人、飢えている人、病で苦しむ人、財産を奪われた人、つま
り、泥棒にあい、物を盗まれた人¹⁷⁾。(このように) 打ちのめされているすべての人々、
苦悩や悲しみをもつ人々は、ひとしくそれぞれ慰められるべきである。心を癒やしてあ
げなければならない。

259.

śrutismṛtyuditaṃ samyañ nibaddhaṃ sveṣu karmasu /
dharmamūlaṃ niṣeveta sadācāraṃ atandritaḥ //¹⁸⁾

自らの行為に関しては、天啓聖典や法典に伝えられ、正しく規定され、生き方の礎とな
る善き人々の振る舞いに倣うべきである。

kēlabakēna tañ lēmēh / taki-takin¹⁹⁾ warawarah sañ hyañ dharmasāstra / ri maryādā niñ caturwarna
sowañ-sowañ / sarwadāya niñ dharmasādhana ika / makapagwana kābhyāsan in śiṣṭācāra //

嫌悪心を洗い流しなさい。聖典や法典の教えを実践しなさい。4つの階層それぞれの生
き方に関しては、本来の務めを全うすることがすべてである。善行²⁰⁾の常修を基本とし
なさい。

260.

ācārād vicyuto jantur na darmaphalam aśnute /
ācāreṇa hi samyuktaḥ sampūrṇaphalabhāg bhavet //²¹⁾

善き人々の振舞い²²⁾から逸脱した者は本務の成果を得ることはない。
善き人々の振舞いを常にする者はじゅうぶんな成果を享受する。

apan ikañ wwañ yan panasar sañke śiṣṭācāra / wyartha ikañ dharmasādhna ginawenya / tan kabhukti phalanya dlāha / kunañ ika sañ apagēh riñ śiṣṭācāra / paripūrṇa phala nikañ dharmasādhana / kabhukti de nira dlāha //

もし人が善行から外れれば、本務を果たすことが虚しく終わり、将来その成果を得ることはない。しかし、善行をゆるがせにしなければ、本務遂行の成果は完全なものとなり、将来それを得ることになる。

261.

amāvāsyāṃ caturdaśyāṃ paurṇamāsyāṣṭamīṣu ca /

brahmacārī bhaven nityam amṛtasnātako dvijaḥ //²³⁾

新月の日、14日目、満月の日、そして8日目に純潔を守るバラモンは、常に甘露の沐浴をする者である。

nihan tâcāra nika sañ brāhmaṇa / yan riñ amāvāsyā / caturdaśī / riñ pūrṇama²⁴⁾ / riñ aṣṭamīkāla kunēñ / brahmacārya juga sira / haywa parēk iñ strī / naran ikañ brata mañkana / amṛtasnātaka //

バラモンは次のように振る舞うべきである。新月の日、14日目、満月の日、8日目は、貞節を守るべきである。つまり女性に近づいてはならない。そのような戒行は、甘露の沐浴²⁵⁾と言われる。

262.

nādattam icchen na pibec²⁶⁾ ca madyaṃ prāṇān na hiṃsen na vadec ca mithyāṃ /

parasya dārān manasāpi necched yaḥ svargam icched grhvat praveṣṭum //²⁷⁾

家に入るように天界に昇ることを希求する者は、与えられないものを欲してはならない。酒を飲んでほならない。命をあやめてほならない。嘘をついてほならない。他人の女は心でも欲してほならない。

lawan haywa aṅalap yan tan pāyu-pobhbayan / haywa tâninum madya / haywa amāti-māti / haywa mithyā riñ wacana / haywa añañēn-añēn paradāra / yan ahyun mantuka riñ swarga //

互いの了解のないもの²⁸⁾を自分のものにしてほならない。酒を飲んでほならない。殺生してほならない。言葉に嘘があつてほならない。不貞を心に思つてほならない。もし天界に赴くことを願うならば。

263.

nṛttaṃ gītavādītraṃ gandhamālyāṃ yānaṃ darpaṃ śayanaṃ cāsavaṃ ca /

saṃvarjayan parvakāle mitāśī marutāṃ lokān akṣayān abhyupaiti //²⁹⁾

舞踊、歌唱、演奏、芳香、花輪、遠出、高慢、居眠り、黍酒を、
月の変わり目には慎み、望みもつつましやかな者は、神々の不滅の世界に到る。

lawan pihĕrana ikañ pinañan / mwañ de niñ amañan / iriñana tañ bhojanakāla / haywa tñigĕl /
haywa tñiduñ / haywa mony-unyan / haywa magandhalepana / haywāsĕkar / inañit / haywa
añlaku-laku / haywa asukha-sukhan darpa wijawijah / haywa awuk turu / haywa añinum madya /
phalanya tan hiniñan / ikañ swargaloka kabhukti dlāha //

また、食事は抑えなければならない。食事をとる者は食事の時間は次のことを併せておこなわなければならない。踊ってはならない。歌ってはならない。音を奏でてはならない。香油を塗ってはならない。花を身につけたり、花輪を作ったいしてはならない。散歩をしてはならない。娯楽に興じ、調子にのり、興奮したりしてはならない。寝入る³⁰⁾のも禁物である。酒も飲んでではない。(以上の禁戒を守る) 成果は無量大である。将来天界を享受することになるだろう。

264.

yamān seveta satataṃ na nityaṃ niyamān budhaḥ /
yamān pataty asevan hi niyamān kevalān bhajan //³¹⁾

賢者は常に制戒を実践すべきである。生活規定については常にというわけではない。制戒を行わず生活規定のみに専念すると、(カーストから) 落ちる。

lawan yama ikañ prihĕn nitiyā gawayakĕna / kunĕñ ikañ niyama / wĕñañ ika tan lañgĕñĕn
gawayakĕna / apan ika sañ manĕkĕt gumawayakĕn ikañ niyama / tātan yatna ri kagawayan iñ
yama / tibā sira riñ nirayaloka //

また、制戒は常に行うよう努めなければならない。生活規定のほうは、必ずしも常にしなければならないということはない。なぜならば、生活規定に専念して、制戒の実践に努めなければ、地獄に墮ちる³²⁾からである。

265.

āñśamsyaṃ kṣamā satyaṃ ahiṃsā dama ārjayaṃ /
prītiḥ prasādo mādhuryaṃ mārdayaṃ ca yamā daśa //³³⁾

配慮、忍耐、誠実、不殺生、自制、率直、
楽しさ、優しさ、甘美さ、寛大さ。(これらが) 十の制戒である。

nyañ brata ikañ inaranan yama / pratyekanya nihan / sapuluh kawehnya / āñśaṃsya / kṣamā /
satya / ahiñsā / dama / ārjawa / prīti / prasāda / mādhurya / mārdaya / nahan pratyekanya sapuluh

/ ānṛṣaṅsya / si harimbawa / tan swārtha kewala / kṣamā / si kōlan³⁴⁾ riñ panastīs / satya / si tan mṛṣāwāda / manukhe sarwabhāwa / dama / si upāsama wruh mituturi manahnya / ārjawa / si dugadugābnēr / pṛīti / si gōñ karuṇa / prasāda / hēniñ niñ manah / mādhyurya / manis niñ wulat lawan wuwus / mārda / pōs niñ manah //

さて、制戒と呼ばれる戒行³⁵⁾は列挙すれば次のように全部で十となる。配慮、忍耐、誠実、不殺生、自制、率直、歓喜、優しさ、甘美さ、寛大さ。さて十のものを一つ一つ述べるとする。配慮とは、人を思いやること、自己目的だけにしないことである。忍耐とは、寒暑に耐えることである。誠実とは、嘘をつかないことである。(不殺生とは³⁶⁾生きとし生けるものに幸せをもたらすことである。自制とは、心を抑えて沈着冷静を保つことである。率直とは、誠実でまっすぐなことである。楽しさとは、愛情が豊かなことである。優しさとは、心が澄んでいることである。甘美さとは、容姿と言葉が愛らしいことである。寛大さとは、心が広いことである。

266.

dānam ijjā tapo dhyānaṃ svādhyāyopasthanigrahaḥ /
vratopavāsamaunaṃ ca snānaṃ ca niyamā daśa //³⁷⁾

布施、供犠、苦行、瞑想、学習、禁欲、
誓戒、断食、沈黙、沐浴。(これらが³⁾十の生活規定である。

nyañ brata sapuluh kwehnya / ikañ niyama naranya / pratyekanya / dāna / ijjā / tapa / dhyāna /
svādhyāya / upasthanigraha / wrata / upawāsa / mauna /³⁸⁾ snāna / nahan ta awak niñ niyama /
dāna weweh / annadānādi / ijjā / dewapūjā / ptrpūjādi / tapa / kāyasañśoṣaṇa / kasatan ikañ śārīra
/ bhūśayyā / jalatyāgādi / dhyāna / ikañ śīwasmarāṇa / svādhyāya / wedābhyāsa /
upasthanigraha / kahrētan in upastha / brata annawarjādi / mona / wācaṇyama / kahrtan in ujar /
haywākēcěk kunēñ / snāna / trisandhyāsewana / madhyusa ri kāla niñ sandhyā //

次に挙げる全部で十の戒行は、生活規定と呼ばれるものである。列挙すれば、布施、供犠、苦行、瞑想、学習、禁欲、誓戒、断食、沈黙、沐浴。これらが生活規定を構成するものである。布施とは食べ物などを施し与えることである。供犠とは神々や祖霊を敬い供物を捧げることである。苦行とは身体を干からびさせること、(つまり)体を水分のない状態にすること、地面を寝床とすること、水を取らないことなどである。瞑想とはシワ神を瞑想することである。学習とはウェーダ聖典の学習である。禁欲とは性的行為を抑制することである。誓戒とは、断食などである³⁹⁾。沈黙とは、発話の抑制、(つまり)話を慎むこと、(端的には)べらべら喋るなということである。沐浴とは朝昼晩の礼拝(に関わるもの)で、一日の移り変わりの節目の時に沐浴することである⁴⁰⁾。

267.

dharmenārthaḥ samāhāryo dharmalabdhaṃ tridhā dhanam /
kartavyaṃ dharmaparamaṃ mānavena prayatnataḥ //⁽⁴¹⁾

本務遂行によって富を蓄えるべきである。本務により得られる財は三種である。
ひとは努めて究極の本務を遂行すべきである。

lawan tēkapan in mañarjana / makapagwana ñ dharma ta ya / ikañ dāna antuk niñ mañarjana /
yatika patēlun / sādhana riñ tēlu / kayatnākēna //

どのようにして（富を）獲得すべきか。それは本務に基づいてである。布施は富の獲得
の成果である。それは3つに分けられる。その3つを獲得する手立てを努めて行わな
ければならない。

268.

ekenāṃśena dharmārthaḥ kartavyo bhūtim icchatā /
ekenāṃśena kāmartha ekam aṃśaṃ vivardhayet //⁽⁴²⁾

繁栄を希求する者は一つには本務のために事をなすべきである。
また一つには愛欲のために事をなすべきである。そして（もう）一つを増大させるべき
である。

nihan kramanya n pinatēlu / ikañ sabhāga / sādhana ri kasiddhan in dharma / ikañ kapiñrwa niñ
bhāga / sādhana ri kasiddhan in kāma ika / ikañ kapiñtiga / sādhana ri kasiddhan in artha ika /
wṛddhyakēna muwah / mañkana kramanya n pinatiga / de nika sañ mahyun mañgihakēna ñ hayu //
次のように3つに分けられるものをそれぞれ説明する。まず第一の部分は本務を完遂す
る手段である。第二の部分は愛欲を成就する手段である。第三の部分は実利を完全にす
る手段である。以上、3つに分けられるものをそれぞれ、幸福を得たいと思う者は増大
させなければならない⁽⁴³⁾。

269.

ye 'rthā dharmeṇa te labhyā ye 'dharmeṇa dhig astu tāt /
dharmaṃ vai śāśvataṃ loke na jahyād arthakāṃkṣayā //⁽⁴⁴⁾

実利は本務によって得られるべきである。本務でないものによる実利は唾棄すべきであ
る。この世で本務は恒久のものであり、実利に惹かれて本務を蔑ろにしてはならない。

apan ikañ artha / yan dharma lwir niñ kārjananya / ya ika lābha ñaranya / paramārtha niñ

amaṅgih sukha sañ tumēmwakēn ika / kunēn yan adharma lwir niñ kārjananya / kaśmala ika /
siniṅgahan de sañ sajjana / matañnyan haywa anasar sañke dharma / yan tañ arjana //

さて実利であるが、もし獲得したものが本務に類するものであれば、それは利益と言われる。それを得たものは極上の幸を得ることになる。他方、獲得したものが本務でないものに類するのであれば、それは卑しく、善き人が遠ざけるものである。したがって、実利を追求するにも、決して本務の道から逸れてはならない。

270.

dharmārthaṃ yasya vittehā tasyāñihā garīyasī /
prakṣālanād dhi pañkasya dūrād asparśanaṃ varam //⁴⁵⁾

本務のために実利を求めるよりも、何も求めないほうが優れている。
泥の汚れを落とすよりも、(泥に) 触れないほうがよい。

hana pwa wwañ mañke kramanya / maṅgā⁴⁶⁾ makasādhana ñ adharma / an pañarjanārtha / an
sādhana riñ dharmaprayojana nikañ artha denya / ikañ wwañ mañkana kramanya / lēhēn juga yan
tan pañarjana / apan yukti tēmēn ikañ maniṅgahi latēk sañka riñ mañambah / yadyapin wasēhana //

次のような人がいる。本務を逸脱して富を得ようとする人、(はたまた) 富を求めるのは本務を目的としての手段とする人。こういう人がいる。しかしながら、それよりも、(富を) 求めない方がよい。なぜなら、泥に足を踏み入れたら洗うことになるが、それよりも、泥を避ける方が実に理にかなっているからである。

271.

sarveṣāṃ eva śaucānām arthaśaucaṃ viśiṣyate /
yo 'rthe śucir hi sa śucir na mṛdvāriśuciḥ śuciḥ //⁴⁷⁾

あらゆる清浄のうちで、富の清浄が優れている。
富に関して清浄である人は清浄であるが、泥や水による清浄は清浄ではない。

apan iri sakweh niñ śauca⁴⁸⁾ / nāñ pātraśauca / mṛtśauca / jalaśauca / bhasmaśaucādi / ñhiñ
arthaśauca juga lwih / kaliñanya / ikañ śuci riñ artha ñaranya / sumiṅgah in anyāyārha / ya ika
paramārtha niñ śuci ñaranya / kunañ ikañ śuci de niñ⁴⁹⁾ jalaśaucādi / tan paramārtha niñ śuci ika //

すべての清浄、たとえば瓶の清浄、泥による清浄、水による清浄、灰による清浄などがあるが、その中で、富に関わる清浄が優れている。その意味は、富に関して清浄であるというのは、不正に富を得ないということである。それこそ、最高の清浄であると言われる。他方、水による清浄などの清浄は、究極の意味での清浄ではない。

272.

ye 'rthāḥ kleśena mahatā dharmasyātikrameṇa vā /
arer vā praṇipātena mā sma teṣu kṛthā manaḥ //⁵⁰⁾

大変な痛みを伴うとか、本務を外れるとか、
あるいは敵にひれ伏すとかによって得られる富に心を向けてはならない。

hana yārtha ulih niṅ parikleśa / ulih niṅ anyāya kunēn / athawā kasēmbahan in śatru kunēn /
hetunya ikañ artha maṅkana kramanya / tan keṅinakēna ika //

苦痛の末に得られる富、不正により、あるいは敵に屈することにより得られる富。こう
したことによる富は、獲得を望むべきではない。

273.

jātasya hi kule mukhye paravitteṣu grdhyataḥ /
lobhaś ca prajñām āhanti prajñā hanti hatā śriyam //⁵¹⁾

一流の家に生まれながら他人の財産を得ようと欲する者は、
その貪欲が知性を打ちのめす。打ちのめされた知性が繁栄を減ぼす。

yadyapin kulaja ikañ wwañ / yan enin riñ paraḍṛbyaharaṇa / hilañ kaprajñān ika de niñ⁵²⁾
kalobhanya / hilañ niñ kaprajñānya / ya ta humilañakēn śrīnya / halēpnya salwir niñ wibhawanya //
たとえ良家の生まれであっても、他人の財物を奪いたいと欲すれば、その貪慾により知
性が失われる。知性の喪失は繁栄を毀損する。いわばあらゆる富を（なきものにする）。

274.

dharmas cārthas ca kāmas ca tritayam jīvite phalam /
etat trayam avāptavyam adharmaparivarjitam //⁵³⁾

本務と実利と愛欲、この3つ一組が人生における果実である。
本務を逸脱することなく、この3つを獲得すべきである。

tēlu kēta phala niṅ hurip nāranya / awaknya n tēlu / dharma / artha / kāma / nahan tāwaknya n
tēlu / haywa ta kasēlatan adharmā //

3つのものが人生の果実であると言われる。3つを構成するのは、本務、実利、愛欲。
これらで3つとなる。本務でないものに割り込まれてはならない。

275.

avandhyaṃ divasaṃ kuryād dharmataḥ kāmato 'rthataḥ /
gate hi divase tasmīṃs tadūnaṃ tasya jīvitam //⁵⁴⁾

本務と愛欲と実利にもとづき、一日を実りあるものにすべきである。
一日が過ぎれば、その分、人の人生は短くなる。

haywa tikañ kāla wineḥ niṣphalā / wehēn saphala juga ya / pilih upayogākēna / i kasiddhan in
dharma artha kāma kunēñ / apan⁵⁵⁾ tan wuruñ kṣaya niñ hurip / irikañ kāla / matañnya n
pēñpōñēñ⁵⁶⁾ ikañ hurip haywa kālakṣepa //

時を果なきものにしてはならない。実りあるものにすべきである。できれば、本務、実利、愛欲の完成に向けて（時間を）活用すべきである。なぜならば、時を経ていのちが減びることは必定であるから。したがって、時機を得たいのちの営みが肝心である。時間の浪費は禁物である。

276.

yan na dharmāya nārthāya na kāmāya na śāntaye /
vyartham taj janminām janma marañāyaiva kevalam //

本務のためでも、実利のためでも、愛欲のためでも、寂静のためでもないような、
ひとの一生は無意味である。ただ死のためである。

ikañ wwañ tan paniddhākēn dharma / artha / kāma / mokṣa / heman hana hana apārthaka⁵⁷⁾
huripnya / naran ikān mañkana / umiñū śarīranya pañanēñ in mṛtyu ika //

人が本務も、実利も、愛欲も、解脱も成就しなければ、嘆かわしくも、その一生は無意味である。次のように言われる。体をいたわり、食事を摂るにせよ、それは死を目指すものである。

277.

arthāṃs tyajata pātreṣu bhajadhvaṃ kāmajān guṇān /
priyaṃ priyebhyaḥ kuruta mṛtyur hi tvarate jayī //⁵⁸⁾

富をふさわしい人々に喜捨しなさい。愛欲より生じたものを分け与えなさい。
愛しい人々に愛情を注ぎなさい。死が勝利を目指して急いでいるゆえに。

matañnya n tiṅgalakēna ikañ artha / dānakēna ri sañ pātra / pātra naran sañ yogya wehana dāna /
mañkana ikañ bhogopabhoga / salwir niñ wiṣaya / bhuktina tika⁵⁹⁾ / ikañ watsu sānukhe ri⁶⁰⁾

hatinta / wehakēna riñ manukhe ri⁶¹⁾ hatinta / sakasēdēpta⁶²⁾ / apan ikañ mṛtyu agyā juga ya / tan kawēnañ inalahakēn //

それゆえ、富を捨てなさい。ふさわしい人に与えなさい。ふさわしい人というのは与えるのに適切な人という意味である。このように、あらゆる享樂、(すなわち) 享受の対象、自らの心を楽しませてくれるすべてのものは、思うがまま、自分を幸せにしてくれる人に与えるべきである。なぜなら、死は急ぎ来るものであり、打ち負かすことができないからである。

278.

ihaivaikasya nāmutrāmutraikasya no iha /
iha vāmutra vaikasya nāmutraikasya no iha //⁶³⁾

ある人にはこの世だけであの世はなく、ある人にはあの世のみがあってこの世はない。またある人にはこの世もあの世もあり、またある人にはこの世もあの世もない。

apan ikañ wwañ nāranya / hana sukha mañke juga / tan sukha riñ janmāntara / hana ta sukha riñ janmāntara juga / tan sukha mañke / hana ta sukha mañke / riñ janmāntara waneh sukha tah / hana tātan sukha mañke / tan sukha riñ janmāntara //

さて次のような人がいると言われる。現世にのみ幸せがあり、あの世には幸せがない人、あの世にこそ幸せがあって、この世には幸せがない人、この世に幸せがあって、あの世にも幸せがある人、この世に幸せがなく、あの世にも幸せがない人。

279.

dhanāni yeṣāṃ vipulāni santi nityaṃ ramante suvibhūṣitāś ca /
teṣāṃ ayaṃ śatruvaraghna loko⁶⁴⁾ nāsau sadā dehasukhe ratānām //⁶⁵⁾

豊かな財をもち、美しく飾って楽しんでいる者たち、
この世は彼らのものである、最上の敵すら倒す者よ。常に身の丈のものに満足している者たちのものではない。

sugih ikañ sukha mañke nāranya / hana wwañ sugih tan pahīnan⁶⁶⁾ kweh niñ māsnya piraknya / ndān bhinuktinya juga / sinaṇḍaṇnya / pinaṇanya pisaninū⁶⁷⁾ dadahakēna riñ dharmakriyā / ikañ wwañ mañkana prawṛttinya / ya ika sukha mañke juga nāranya //

この世で富裕で幸せであると言われるのは、富裕、(つまり) 金や銀が数え切れないほどたくさんあって、人生を楽しみ、(つまり) 装いや食事を(豪華に) 楽しみながら、本務に関わる営みを決して犠牲にしない人。このように振る舞う人はこの世で幸せになると言われる。

280.

yuktayogās tapasi prayuktāḥ svādhyāyāsīlā janayanti deham /
jītdriyā bhūtahite nivīṣṭās teṣām ayaṃ nāsti paraś tu lokāḥ //⁶⁸⁾

ヨーガに集中し、苦行に専念し、学問を常として体を育み、
感覚器官を制御し、生きとし生けるものに尽くす人には、この世はなくあの世がある。

kunañ ikañ wwañ tan kaluban masamādhi / jēñēk gumawaya ñ tapa / tuhagana⁶⁹⁾ widyābhyāsa /
jītdriya / māsih riñ sarwasattwa / ikañ wwañ mañkana / ya ika sukha dlāha ñaranya //

他方、間断なく精神集中し、苦行に専念し、学問を怠らず、感覚器官を制御し、すべての
生きものを慈しむ、このような人は来世で幸せになると言われる。

281.

ye dharmam eva prathamam caranti dharmeṇa labdhvā tu dhanāni loke /
dārān avāpya kratubhir yajante teṣām ayaṃ caiva paraś ca lokāḥ //⁷⁰⁾

本務を第一として行い、本務によってこの世で富を得て、
妻を娶り、供犠により神々を祀る人には、この世もあの世もある。

nihan lwir nikañ wwañ sukha mañke / sukha dlāha / hana ya mañabhyāsa dharmasādhana / ri
tēlasnya n paripūrṇa kadamēlan iñ dharmasādhana denya / mañarjana ta ya artha / dharmatah⁷¹⁾
denyāñarjana / mastrī pwa ya / mamukti wiṣaya / dharmata denya / muwah mayajña⁷²⁾ ta ya /
dewayajña / pitryajñādi / ikañ wwañ mañkana / yatika sukha mañke / sukha dlāha ñaranya //

この世でもあの世でも幸せなのは次のような人である。本務の遂行を常とし、成就の後
には、(つまり)本務の遂行が完了の後、富の獲得を求める。本務に基づいての富の獲
得である。また妻を娶り、感覚器官の対象を享受するが、それも本務に基づいたもので
ある。さらに供犠の祭祀を行う。神々への供犠、祖霊への供犠などである。このような
人はこの世でも幸せであり、あの世でも幸せであると言われる。

282.

ye naiva vidyām na tapo na dānam na cāpi pūjām kratubhir yajante /
na cādhigacchanti sukham abhāgyās teṣām ayaṃ naiva paraś ca lokāḥ //⁷³⁾

学問も苦行も布施も供養も祭祀も行わず⁷⁴⁾、
幸福を得ることのない恵まれない人には、この世もあの世もない。

kunañ ikañ wwañ mañke kramanya / tan pañaji ya / tan patapa / tan paweh dāna / tan pūjā / tan

yajña / ikañ ginawayakēnya⁷⁵⁾ / nirbhāgya ta ya / tiwas wiphala / asiñ sasolahnya / tātan panēmu sukha / ikañ wwañ mañkana kramanya / yatika tan sukha mañke / tan sukha dlāha //

さて次のような人がいる。学問もせず、苦行もせず、布施もせず、供養もせず、犠牲祭もしない。こうした所行の人は不幸であり、落伍者で、成果がない。(つまり) そのすべての行為が幸福をもたらさない。このような人は、この世でも幸せでなく、あの世でも不幸である。

283.

akrodhanaś ca rajendra satyaśīlo dṛḍhavrataḥ /
ātmopamaś ca bhūteṣu sa tīrthaphalam aśnute //⁷⁶⁾

王の中の王よ、怒ることなく、虚偽を口にしないことを常とし、誓戒を固く守り、生きとし生けるものに自らと対等に接する人は、聖地の果報を得る。

hana ya wwañ mañke kramanya / tan kataman krodha / satya ta ya / apagēh ta ya riñ brata / māsih riñ sarwabhūta / tar pahi lawan awaknya / ikañ sarwasattwa ri hiḍēpnnya / ika wwañ mañkana kramanya / phala niñ tīrthayātrā katēmu de nika dlāha / tīrthayātrā naran in mahas aglēm atīrtha //

次のような人がいる。怒りに襲われることがなく、嘘偽りなく、誓戒を守ることに揺るぎなく、一切生類を慈しむ、(すなわち) 生きとし生けるものは自分と違いはないと思う人。そのような人は、将来、聖地巡礼の果実を得ることになる。聖地巡礼というのは、旅をして聖なる沐浴地を巡ることを喜びとすることである⁷⁷⁾。

284.

anupoṣya trirātreṣu tīrthāny anadhigamya ca /
adattvā kāñcanaṃ gāś ca daridro nāma jāyate //⁷⁸⁾

三夜の断食をせず、聖地にも近づかず、
黄金も牛も伏せしない人は、貧しき人と呼ばれるようになる。

nihan hala niñ tan paṭīrtha / hana ya wwañ mañke kramanya / tapwan popawāsa tiga ñ wēni / tapwan pādys riñ tīrtha / tapwan paweh kāñcanadāna / godāna / ikañ wwañ mañkana kramanya / ya ika paramārtha niñ daridra narananya //

聖地巡礼をしない罪は次のようである。次のような人がいる。三晩の断食をせず、聖地での沐浴をせず、黄金の布施も牛の布施もしない。このような人は、極めつけの貧者と
言われる。

285.

sadā daridrair api hi śakyam prāptuṃ narādhipa /
tīrthābhigamaṇaṃ puṇyaṃ yajñair api viśiṣyate //⁷⁹⁾

王よ、たとえ貧しいものであっても、常に行くことができる
聖地巡礼は、清めとなり、供儀の祭祀にすら優る。

apan mañke kottaman in tīrthayātrā / atyanta pawitra / lwih sanke kapāwanan in yajña / wēnañ
ulahakēna riñ daridra //

さて聖地巡礼のすばらしさであるが、ことごとく穢れを落としてくれ、貧しい者でも行
うことができるので、祭祀も優れている。

286.

mṛto daridrāḥ puruṣo mṛtaṃ rājyam arakṣakam /
mṛtaṃ aśrotriyaṃ śrāddhaṃ mṛto yajñas tv adakṣiṇaḥ //⁸⁰⁾

貧しい人間は死んでいる。守護者のいない王国は死んでいる。聖典に通じたバラモンの
いない祖霊祭は死んでいる。お布施なしの祭祀は死んでいる。

ika tañ wwañ daridra / ya ika māti nāranya / mañkana rāṣṭra / wanwāgōñ / janapada punpunan /
yan⁸¹⁾ tan paratu⁸²⁾ / māti nāran ika / mañkana śrāddha / pitṛtarpaṇa / ya śrāddha nāranya / yan
tan kinahanan sañ śrotriya / māti nāran ika / śrotriya nāran sañ samāpta riñ weda / sañ huwus
tumamakēñ sañ hyañ weda / mañkana yajña yan⁸³⁾ tan padaḥṣiṇā māti nāran ika //

貧しい人は死んでいると言われる。王国も同様である。広大な都市、村落や人々があつ
ても、王がいなければその国は死んでいると言われる。祖霊祭も同様である。祖先に供
物を捧げる儀式が祖霊祭と言われる。聖典に通じた聖者がいなければ、(その祖霊祭は)
死んでいると言われる。聖典に通じた聖者とは、ウェーダ聖典に精通した方、ウェーダ
聖典を完全に修得した方のことである。犠牲祭も同様である。お布施が納められなけれ
ば、(その祭祀は) 死んでいると言われる⁸⁴⁾。

287.

durbhikṣād api durbhikṣaṃ bhayād atibhayaṃ tathā /
mṛtebhyaḥ pramṛtaṃ yānti daridrāḥ pāpakāriṇaḥ //⁸⁵⁾

罪を犯す貧者は、飢饉からさらなる飢饉へ、恐怖からさらなる恐怖へ、
死からさらに重い死⁸⁶⁾へと赴く。

anona pwa kita daridra / mulahakēna ikañ adharma / salwir⁸⁷⁾ niñ kapāpan / ya ika durbhikṣa
sañkēñ durbhikṣa ñaranya / wēkas niñ karaha⁸⁸⁾ / kleśa sañkēñ kleśa / wēkas niñ sinaṅgah kleśa /
bhaya sañkēñ bhaya / atyanta niñ karēsrēs / māti sañkēñ māti / putus niñ sinaṅgah māti //

貧しい者に注目してほしい。(彼らが)本務に悖る行いをする、つまりありとあらゆる
悪事を犯すと、それは飢えから飢えへと至ると言われる。つまり悲惨の極みに追い込ま
れる。(あるいは)痛みから痛みへ、苦痛と言われるものの最たるものに至る。恐怖か
ら恐怖へ、恐ろしさの極限を感じさせられる。死から死へ、死と言われるものの究極に
赴く。

288.

daridrasya manuṣyasya duṣprajñasyādhanasya ca /
kāle 'py uktaṃ hitaṃ vākyam na kaścit pratipadyate //⁸⁹⁾

愚かで財産のない貧しい人の話は、
時機を得て有益であろうと、誰も聞き入れない。

ika tañ daridra / yadyapin prajñā⁹⁰⁾ tuwi / tan hiniḍḍep juga ikañ senujarakēnya / yadyapi mañēne
kāladeśa tuwi / śabda hitāwasāna tuwi / ñuniweh yan apuñguña ikañ wwañ daridra / pisaninun
hanā sambega rumēñwā sojarnya //

貧しい人は、たとえ見識あろうとも、何を話しても気に留められることがない。たとえ
よい時機に適切な言葉で吉祥なことを述べようとも。ましてや、貧しい人が愚かであれ
ば、何を話そうか、感動して聞く者はあり得ない。

289.

santo 'pi na virājante lupṭārthasetyare guṇāḥ /
āditya iva bhūtānām śrīr guṇānām prakāśikā //⁹¹⁾

富を失えば、ほかに美德があろうとも輝くことはない。
生類を照らすのが太陽であるのと同じく、美德を輝かせるのは富である。

apan ikañ daridra ñaranya / yadyapin ika makweh guṇa kawruhanya / tan prakāśa ika / tan
paripūrṇa halēpnya / kadī rūpa sañ hyañ āditya n* prakāśākēñ ika nā n* sarwabhūta / sira
nimittanyān katon //

というのも、貧者というのは、たとえ多くの美德があると知られていても、(それで)
際立つことはない。魅力が完全とはならないのである。あたかも太陽の美しさが例えば
すべての生き物を輝かせるので、それ故、(際立って)見られるのである。

290.

caṇḍālaś ca daridraś ca dvāvetau sadṛśau matau /

caṇḍālasya na gr̥hṇanti daridro na prayacchati //⁹²⁾

チャンダラと貧者の二者は似ていると思われる。

チャンダラの布施を受け取る者はいないし、貧者は布施をしない。

ikañ daridra nāranya / mwañ caṇḍāla / yan iniñētīñētēn gatinya / paḍa juga ya / ri kapwa tan pagawe dāna / apan ikañ caṇḍāla nāranya / tan tinaṅgap dāna nika / mañkana ikañ daridra / tan hana gantanyāweha dāna //

貧しい人とチャンダラとは、その振舞いを注意深く観察すると、どちらも布施をしないという点で、同じであるとみられる。というのは、チャンダラといわれる人々の施物は受け取られることがないし、同様に、貧しい人々は、布施をするようなことが起こり得ないからである。

291.

ahiranyam adāsaṃ tad alpānnādyam agorasam /

gr̥haṃ kṛpaṇavṛttīnāṃ narakasya paro nidhiḥ //⁹³⁾

黄金もなく、召使もおらず、食糧も僅かで、牛乳もない

貧しい暮らしの人の家は、地獄の究極の蔵である⁹⁴⁾。

mañkana umah niñ daridra nāranya / yan rasana / tan hana juga pahinya lawan narakaloka / rūpa niñ tan hana ñ mās iriya / tan hana ñ rare hulun / tan hana ñ annādi bhoga iriya / mwañ tan hana ñ gorasa //

貧者と言われる人の家は、思うに、地獄と異なるところがない。そこには黄金がなく、若い召使がない。そこには食べ物などの楽しみがない。そして牛乳もない。

292.

yaś ca kṛśaḥ kṛśadhanaḥ kṛśabhṛtyaḥ kṛśātithiḥ /

sa vai rājan kṛśo nāma na śarīrakṛśaḥ kṛśaḥ //⁹⁵⁾

財産が乏しく、召使いにひもじい思いをさせ、客人もろくにもてなせない⁹⁶⁾、か細い人、

王よ、そのような人こそ「痩せっぽち」というのであって、体が細い人が痩せっぽちなのではない。

ika tañ daridra / ya ika wyakta niñ sinaṅgah makuru ñaran ika / yadyapin alēmwa tuwi / yan⁹⁷⁾
tan pamās / akuru ñaran ika / mañkana ikañ wwañ tan pahamba / tan wēnañ aweha mañana /
wwañ tan patamuy kunañ / tan pinara-paran / yatika prasiddhākuru ñaranya / kaliñanya tan kuru
niñ śarīra kāraṇa niñ sinaṅguh akuru //

貧者は痩せ細っているとされるのが当たり前である。太っても、黄金を所有していなければ、痩せていると言われる。同様に、(十分に) 食事が与えられないので、召使いがおらず、客人がいない、(つまり) 人が訪れることがない人が、まさに痩せ細っているとされる。ここで言わんとしているのは、体が細いことが痩せ細っているとされる理由ではないということである。

293.

suhṛdām hi dhanam bhuñkte kṛtvā praṇayam īpsitam /
pratikartum śaktasya jīvitān maraṇam varam //⁹⁸⁾

望み通りに友情を結んで、友の財産を享受しても、
お返しをすることができない人は、生きているよりも死んだほうがましだ。

apan ikañ daridra ñaranya / bhinuktinya ta wibhawa niñ mitranya / tinēkan saprayojananya / ndan
pisanīṇu ya wēnañ amalēsa ri mitranya / de niñ daridranya / de niñ kaśmala niñ buddhinya kunēñ
/ lobha humēt atēñēt / yan paramārthanya / lēhēna ñ⁹⁹⁾ māti sañkērika //

というのも、貧者と言われるのは、友人の財産を、望みのものすべてに至るまで享受しながら、その友人にまったくお返しすることができない。その理由は、貧しさであったり、心の卑しさである。欲深く、狭量で、吝嗇になる。突き詰めて言えば、そうなるよりも死んだほうがよい。

294.

na tathā khidyate rājan prakṛtyā nirdhano janaḥ /
yathā bhadrāṇi samprāpya tair vihināḥ sukhaidhitaḥ //¹⁰⁰⁾

王よ、生まれつき財のない者は、
安楽に育ち美しい物を得ながらそれを失った者ほどには落ち込むことはない。

lēhēñ mata lara nikañ wwañ daridra swabhāwa / kāsyasiḥ sadākāla / tan kadi lara nikañ wwañ
daridra mūla sugih¹⁰¹⁾ / agōñ tēmēñ lara nika //

生まれつき貧しい者は常に憐みの対象となるが、その苦痛はまだましである。元々は裕福だったのに貧しくなった人の苦痛ほどではない。後者の苦痛はとてもし大きい。

295.

prāyeṇa śrīmatām gehe bhoktuṃ śaktir na vidyate /
daridrāṇāṃ tu rajendra saśākhāṃ api jīryate //¹⁰²⁾

富のある人の家では食を味わう能力がないのが常だが、
王の中の主よ、貧者のところでは、枝のついたもの¹⁰³⁾でも消費される。

prāya nika sañ sugih / hīnaśakti juga ya ri kabhuktiyan ikañ wiṣaya / kunēñ ikañ daridra /
yadyapin gaṇan towi / hēnti juga ya //

一般に金持ちは食事の対象となるものを味わう能力が乏しい。それに対し貧者は、野草
であってもひたすら食べ尽くす。

296.

sampannataram evānnaṃ daridrā muñjate sadā /
kṣut svādutām janayati sā cādhyeṣu na vidyate //¹⁰⁴⁾

貧者はよりおいしい料理を常に味わう。
飢えが美味を生み出すのだが、富める者たちにはそれがない。

sañkṣepanya / asiñ wastu pinañan iñ daridra juga n enak / apan ikañ lapā / yamañun inak niñ
pinañan / riñ daridra tāndēlan¹⁰⁵⁾ ika / kunēñ ri sañ sugih / tan ungu¹⁰⁶⁾ ika //

要するに、貧者はあらゆるものをおいしく食べる。なぜなら飢えこそ食べ物に美味をも
たらすからだ。それ（飢え）は貧者のもとにはしっかりとあるが、富める者には寄り付
かない。

297.

kṣud dharmasaṃjñāṃ praṇudaty ādatte dhairyam eva ca /
arthānūsāriṇī jihvā karṣaty eva rasaṃ prati //¹⁰⁷⁾

飢えが本務への意識を遠ざけ、平静さを奪う。
舌が対象を追い、美味なるものに向かって近づいていく。

lawan ta waneh / ikañ lapā mañhilañakēñ kayatnan / ri kagawayan iñ dharmasādhana ya / mwañ
mañhilañakēñ kadhīran ta ya / tēkwān ikañ jihwā / meñēt juga ya riñ rasa / ya tā matēkakēñ lapā //

また他の人々が言うには、飢えが本務遂行の努力を台無しにする。また自制心を破壊す
る。そのうえに、舌が味へと意識を結ぶ。（こうしたことを）引き起こすのが飢えである。

298.

viṣamāṃ hi daṣāṃ prāpya daivaṃ garhayate 'budhaḥ /
ātmanaḥ karmadoṣaṃ hi na vijānāty apanḍitaḥ //¹⁰⁸⁾

愚か者は困難な状況に至ると、宿命¹⁰⁹⁾だと非難する。
学識なく、それが自らの行為の悪果だと理解しない。

ndān ikañ apuṅguṅ / manēsēl purākṛta juga ya / yan panēmu lara dukkha / apan¹¹⁰⁾ tan eñēt ya /
an aśubhakarma ginawenya nūni //

さて、愚かな人は、痛みや苦しみを得ると、前世の行為¹¹¹⁾を非難する。なぜなら過去に自分が悪行をおこなったと認識していないからである。

299.

īhamānaḥ samārambhān yadi nāsādayed dhanam /
tapo mahat samātiṣṭhen na hy anuptaṃ prohati //¹¹²⁾

もし諸事を試みても富を得られないのであれば、
厳しい苦行を行うべきである。種を蒔かねば芽は出ないゆえ。

paramārhanya / ikañ wwañ wiphala prayāsa / tan tēmu ñ artha / an atīśaya gōñ niñ kotsāhanya n
pamrih aṅarjana / yogya nikan pagawayan tan pamisanmisan kēta ya / apan¹¹³⁾ tan hana tumuwuh
yan¹¹⁴⁾ tan inipuk nāranya / hana niñ pañipuk hana niñ tumuwuh / hiñanyan tan hana
śubhakarmanya nūni kaliña nika¹¹⁵⁾ //

究極の真理を説く。努力しても結ばない人、つまり、富を得ようと大変な努力をしても
富を得ることがない人は、何度も繰り返しておこなうべきである¹¹⁶⁾。なぜなら、養生¹¹⁷⁾
といわれることをしなければ成長することはない。養生なくして成長なしである。
つまるところ、前世の善行がなければ、ということである。

300.

atyantavimukhe daive vyarthayatneṣu karmasu /
tejasvino daridraśya vanād anyat kutaḥ sukham //¹¹⁸⁾

神力が完全にそっぽを向き、いかなる行いも努力が実を結ばないのであれば、
精力ある貧者には、(苦行) 林以外にどこで幸を得られようか。

hana pwa daridra agōñ wiweka / ndān wyartha juga solahnya / makahetu tan hana
śubhakarmaphalanya / tan hana kāraṇa nikān panēmwa ñ sukha / ñhiñ halas juga / tyaktaparigraha

anusupa riñ alas ta pwa ya //

貧しいが判断力は高く、前世の善行の果報がないために、何をしても実を結ばない人は、林以外に幸福を得るあてはない。所有物を捨てて森に入ることだ。

注

*以下で用いる略称

IS: *Indische Sprüche* (Böhtlingk 1966)

Manu: *Manusmṛti* (Mandik 1992; 電子テキスト)

MSS: *Mahāsubhāṣitasamgraha* (Sternbach 1974–2007; 電子テキスト)

OJED: *Old Javanese-English Dictionary* (Zoetmulder 1982)

PT: *Pañcatantara* (Bühler 1886; 電子テキスト)

SS: *Sārasamuccaya* (Raghu Vira 1962)

なお、参照偈の下線は、本テキストと異なっている読みを示すために付してある。

1) 安藤2018; 2019; 2020; 2021; 2022; 2023。

2) Raghu Vira は指摘していないが、Mbh 12.258.25が本偈とほぼ同一である：

na ca śocati nāpy enam sthāviryam apakarṣati /

śriyā hīno 'pi yo gehe ambeti pratipadyate //

Mbh では前の偈からトピックが父親から母親に移っており、「母親は万能薬」と述べ、続いて、「富はなくても家に帰っておかあさんと言う者は悲しむことはない」とする。

3) Raghu Vira はなぜかこの偈の抄訳すら載せていない。このテキストの読みに従うかぎりでは、古ジャワ解説が示すとおり、父親と子供が話題となっていると解釈するのが妥当と思われる。Mbh の偈との部分的な読みの違いが際立つ。

4) Raghu Vira は指摘していないが、Mbh 12.258.26が本偈とほぼ同一である：

putrapautrasamākīrṇo jananīm yaḥ samāśritah /

api varṣāsatasyañte sa divihāyanavac caret //

第4句の相違が顕著である。Mbh では後半が「百歳が満ちても2歳児のよう」と母子関係を強く表現しているの対し、SS では、美德の結果としての長寿と天界という描写になっている。

5) Cf. Mbh 12.258.28:

tadā sa vrddho bhavati yadā bhavati duḥkhitah /

tadā śūnyam jagat taṣya yadā mātrā viyuḥyate //

ここでは前半と後半でそれぞれ yadā / tadā で展開しており、前半は苦悩→老い、後半は母親喪失→世界の空虚という叙述だが、SS の偈は、最初の3句すべてが母親喪失の帰結となっている。

6) Raghu Vira は指摘していないが、MSS 2337が本偈と同一である。

7) Cf. Mbh5.38.1 (= Manu 2.120):

ūrdhvaṃ prāṇā hy utkrāmanti yūnaḥ sthavira āyati /

pratyutthānābhivādābhyāṃ punas tām pratipadyate //

8) Cf. Mbh 5.39.60:

abhivādanaśīlasya nityaṃ vṛddhopasevinaḥ /
catvāri sampravardhante kīrtir āyur yaśo balam //

MSS 2336も本偈とほぼ一致するが、増大する4つの列挙が少し異なる：

abhivādanaśīlasya nityaṃ vṛddhopasevinaḥ /
catvāri tasya vardhanta āyuh prajñā yaśo balam //

Manu2.121はa-cまでは本偈と一致するが、第4句で挙げられる項目に一部異なるところがある：

abhivādanaśīlasya nityaṃ vṛddhopasevinaḥ /
catvāri tasya vardhante āyur dharmo yaśo balam //

9) 古ジャワ語解説では、力を名誉より先に挙げている。

10) Cf. Manu 4.18 (=Bṛhatkathāślokaśaṃgraha 7.78):

vayaśaḥ karmaṇo `rthasya śrutasyābhijānasya ca /
veśavāgbuddhisārūpyam ācaran vicared iha //

Kūrmapurāṇa2.15.18もこれとほぼ一致する (iha / sadāの相違のみ)。SSの偈とは第4句が大きく異なる。

11) 校訂テキストの nān の nā を “such as” (OJED, p. 1166) の意味にとり、ñ と区切って表記する。

12) Raghu Vira が疑問符を付しているとおおり、ここに asambhawa (“impossible”) があると意味が通らないし、その前の anuñ (“someone”) も不可解である。この二つの語を外して仮に訳しておく。

13) Cf. Mbh 12.221.40:

viśaṅgam trastam udvignam bhayārtam vyādhipīditam /
hṛtasvaṃ vyasanārtam ca nityam āśvāsanti te //

14) 校訂テキストの bodhanān を OJED の登録 (wodhana, p. 2309) に準じて修正。解説中にもう1箇所あらわれる bodhanān も同様に修正。

15) OJED の登録 (lapā, p. 984) に従って、語末の a を長音表記に修正。

16) OJED の引用例 (āśwāsa, p. 150) に準じて、語末の ā を短音表記に修正。

17) 同意のフレーズが3つ続くので、言い換えと解釈し便宜的に訳し分けておく。

18) Manu 4.155が本偈と完全に一致する。

19) OJED の登録 (taki, p. 1903) に従い、ハイフンを入れた表記に修正。

20) サンスクリット偈の sadācāra を古ジャワ語解説では śiṣṭācāra としている。sadācāra の方はマヌ法典の解釈に準じて「善き人々の振舞い」(渡瀬 1991, p. 145) とするが、古ジャワ語の śiṣṭācāra は OJED (p. 1792) では単に “good or virtuous behaviour” とするのみである。

21) Raghu Vira は Manu 4.156 との関連を指摘するが、本偈にさらに近似するものが同法典の別の章にある。Cf. Manu 1.109:

ācārād vicyuto vipro na vedaphalam aśnute /
ācāreṇa tu saṃyuktaḥ sampūrṇaphalabhāḥ bhavet //

この偈をもとにパラモン→人、ヴェーダ→本務と、一般向けに書き換えたという解釈が可能である。なお、MSS 4438がManuとほぼ同一 (bhavet / mṛtaḥの相違のみ)。

22) 前の偈からの類推で、ācāra は sadācāra を指すと解釈する。もちろん、ācāra 単独でも sadācāra を意味し得る (Monier-Williams, p. 131)。

23) Cf. Manu 4.128:

amāvāsyām astamīm ca paurṇamāsīm caturdaśīm /

brahmacārī bhaven nityam apy rtau snātako dvijah //

用いられている語句や本旨は近似するが、前半部の語順の違い、後半の rtau / amṛta の解釈が大きく異なっていることが注目される。なお、Kūrmapurāna 2.14.72後半が、文脈は異なるものの本偈前半と一致する：

nihāre bāṇaśabde ca samdhyayorubhayorapi /
amāvāsyāṃ caturdaśyāṃ paurṇamāsyāṣṭamīṣu ca //

- 24) 写本の異読、及び OJED の登録や引用例に準じて、テキストの pūrṇimā を修正。
- 25) 注23で指摘したように、Manu では apy rtau としており、これは「たとえ受胎に適した時 (rtu) であっても」提示した月齢の折には性交はしてはならないという規定である。Manu では3.46-47で rtau がいつであるかを示しており、その前に3.45で「月相の変わり目は除く」とはっきり述べている。Manu4.128はそれらを踏まえたものである。他方、本テキストでは、サンスクリット偈で amṛtasnātaka と読み、古ジャワ語でもそれを踏まえた解釈をしている。本テキストの作者(編者)、および古ジャワ世界で、rtu に対する理解が不足していたことが要因かと推測される。ちなみに OJED では、rtu は“season”という意味のみ提示されている (p. 1545)。
- 26) 校訂テキストの pivec を一般的な表記に修正。
- 27) Mbh など SS の他の偈を共有するサンスクリットのテキストには類例が見つからないが、仏教経典 Nandikasūtra 断簡ギルギット写本に対応するポタラ宮写本に含まれる次の偈 (工藤 2014, p. 492) は主旨は同一であり、前半の表現は異なるものの後半はほとんど一致する：
- prāṇam na hanyān na haret parasvaṃ mṛṣā na bhāṣen na pibec ca madyam /
parasya bhāryāṃ manasāpi necchet svargaṃ ya icchet gr̥hvat pravīṣṭum //
- 28) OJED の引用例 (ubhaya, p. 2093) では pāyu と pobhayan を分かち書きにしているが、ここでは Raghu Vira が注記する解釈 (“mutually considered”) に準じておく。
- 29) Manu2.177-178が述べる内容の一部が本偈との関連を示唆する：
- varjayan madhu māṃsaṃ ca gandhaṃ mālyam rasān striyaḥ /
śūktāni yāni sarvāṇi prāṇinām caiva hiṃsanam //
abhyaṅgam aṅjanaṃ cākṣṇor upānacchatradhāraṇam /
kāmaṃ krodhaṃ ca lobhaṃ ca nartanaṃ gītavādanam //
- 30) Raghu Vira は awuk をサンスクリットの atīṣayam にあて、「寝すぎない」という意味に解釈しているようだが、OJED ではこの語の基語や派生形、適切な意味が見つからず、ここでの訳出を控えておく。
- 31) Cf. Manu 4.204:
- yamān seveta satataṃ na nityaṃ niyamān budhaḥ /
yamān pataty akurvāno niyamān kevalān bhajan //
- 32) サンスクリット偈の patati (「落ちる」) は、Manu を踏まえると、明らかに patita になる、つまり、カースト体制から外れる存在となることを指しているが、古ジャワ解説は、古典インド法典の理解不足からか、あるいは古ジャワ世界で意味が通りやすいようにしてか、「地獄に墮ちる」と明快な表現を用いている。
- 33) IS 949及び MSS 4869は本偈と完全に一致する。Cf. Mbh 12.262.37:
- ānṛśamsyaṃ kṣamā śāntir ahiṃsā satyam ārjavam /
adroho nābhimānas ca hrīṣ tītikṣā śamas tathā //
- 前半に列挙される5項目は一致するものの、後半は全く異なり、これらが制裁であるという定義づけにも関わっていない。

- 34) SS 第98偈の古ジャワ解説での用例（安藤2020, p. 170）、及び OJED の登録（köl, p. 840）に準じ、校訂テキストの *kēlan* を *kōlan* の意味で解釈し、表記を修正する。
- 35) 古ジャワ解説者が *yama* を *brata* の類と捉えているのが注目される。
- 36) ここだけ主題の明示がないが、ほかの9つが項目名を挙げて言及されていること、そして直前の項目 *satya* の解説とは意を異にしていることから、これは *ahiṅsā* についての解説であると解釈し、訳を補っておく。
- 37) *Raghu Vira* は指摘していないが、*Liṅgapurāṇa* に最も近似する偈が見つかる (1.8.29cd-30ab):
śaucam ijjā tapo dānam svādhyāyopasthanigrahaḥ /
vratamaunopavāsam ca snānam ca niyamā daśa //
 十の戒行のうち、第1が *dāna* でなく *śauca* に、第4が *dhyāna* でなく *dāna* となっている以外は一致する。*niyamā daśa* と明示的に10項目を列挙する例は他の文献に見当たらない。
- 38) 校訂テキストには、ここの区切り線が欠落している。
- 39) 古ジャワ解説の冒頭で *upawāsa* を10の *niyama* の一つとして列挙しながら、ここでは、誓戒 *brata* の説明（言い換え）で食を控えることを例示し、*upawāsa* 自体に言及していない。
- 40) *Manu* 2.101-103で *saṃdhyā*（薄明）の礼拝について規定しているが、その礼拝と沐浴を関連付けた説明はない。むしろ *Manu* では、常に沐浴して清らかであるようにと説いており (2.176)、古ジャワ解説者が何をもとにしてこの箇所に *saṃdhyā* を導入したのかが不明である。
- 41) *Raghu Vira* は指摘していないが、本偈は *Mbh* 13.129.18と同一である。なお校訂テキストの *dharmā paramaṃ* という分かち書きを修正。
- 42) *Raghu Vira* は指摘していないが、本偈は *MSS* 7668と同一であり、*Mbh*13.129.19ともほとんど一致する (*dharmārthaś cartavyo* の下線部の相違のみ)。
- 43) サンスクリット偈では *aṃśa* (“a share, portion”) として *dharmā* と *kāma* について言及し、この2つから当然類推される *trivarga*（ヒンドゥー教の人生の三大目的）の残りの一つ *artha* については名称を挙げずにその「一つの *aṃśa* を増大せよ」とする。古ジャワ解説では、その文脈をよく理解し、第三の部分を *artha* の成就とはっきり述べている。なお、*trivarga* については *Manu* 2.224で、つまるところ *dharmā · kāma · artha* の三つ組が至福をもたらすとしている：
dharmārthāv ucyate śreyāḥ kāmārthau dharmā eva ca /
artha eveha vā śreyas trivarga iti tu sthitiḥ //
- 44) Cf. *Mbh* 12.281.19:
ye 'rthā dharmeṇa te satyā ye 'dharmeṇa dhig astu tām /
dharmam vai śāsvatam loke na jahyād dhanakāṅksayā //
- 45) Cf. *Mbh* 3.2.47:
ataś ca dharmibhiḥ pumbhir anīhārthah praśasyate /
prakṣālanād dhi paṅkasya dūrād asparśanam varam //
 後半は一致するが前半は全く異なる。ただし、校訂版注記によれば、本偈前半と一致する読みをもつ写本は少なくない。特に、ほとんどのベンガル写本とデーヴァナーガリー写本は次の偈を上掲の前半2句の後に入れているという：
dharmārtham yasya vittehā varam tasya nirīhatā
Hitopadeśa 1.174は、この *Mbh* の異読を含む偈と同一であり、本偈により近い：
dharmārtham yasya vittehā varam tasya nirīhatā /
prakṣālanād dhi paṅkasya dūrād asparśanam varam //

- 46) 校訂テキストの maṅga を OJED の登録および用例 (p. 97) に準じて修正。
- 47) Raghu Vira は IS 6957 との近似を指摘するが、Manu 5.106 もそれと同一である：
 sarveṣām eva śaucānām arthaśaucaṃ param smrtam /
 yo `rthe śucir hi sa śucir na mṛdvāriśucih śucih //
- 48) OJED は śoca で登録し (p. 1801)、用例もすべてその表記で採用しているが、ここでは、サンスクリット語そのままの śauca と読む校訂テキストに従っておく。
- 49) 校訂テキストの deniṅ を分かち書きに修正。
- 50) Raghu Vira が指摘する Mbh 5.39.61、及びそれと同一である MSS 535 が本偈に近似する：
atikleśena ye `rthāḥ syur dharmasyātikrameṇa ca /
 arer vā praṇipātena mā sma teṣu manah krthāḥ //
- なお、Mbh 異読の注記が示すように、Śukasaptati にも同類の偈が含まれる (23.24)：
atikleśena ye hy arthā dharmasyātikrameṇa ca /
śatrūnām praṇipātena mā sma teṣu manah krthāḥ //
- 51) Cf. Mbh 5.70.18:
kule jātasya vrddhasya paravitteṣu grdhyataḥ /
 lobhaḥ prajñānam āhanti prajñā hanti hatā hriyam //
- 52) 校訂テキストの deniṅ を分かち書きに修正。
- 53) Raghu Vira は指摘していないが、Mbh 13.112.17 は本偈と完全に一致する。Brahmapurāṇa 217.11 もほぼ同一である (jīvite / jīvivaḥ の相違のみ)。
- 54) Raghu Vira は指摘していないが、MSS 3261 が本偈と完全に一致する。
- 55) 校訂テキストで Raghu Vira が括弧付きで n を補っている読みが適切であり、それを採用する。
- 56) OJED の見出し語登録と引用例 (pōn, p. 1342) に準じて、校訂テキストの pēṅpēṅn を修正。
- 57) OJED には登録されておらず、サンスクリット語の apārthaka (“useless”) をもとに訳しておく。
- 58) Cf. Mbh 5.58.20 :
 arthāms tyajata pātrebhyah sutān prāpṇuta kāmajān /
 priyaṃ priyebhyaś carata rājā hi tvarate jaye //
- Mbh では王 (ユディシュティラ) が勝利に向けて急いでおり危険が迫っているとして、ドゥリタラーシュトラに対し、財物の喜捨、子を授かること、愛しき者への好意を促している。なお、Raghu Vira は指摘していないが、MSS 2952 が Mbh の偈と同一である。
- 59) 校訂テキストの bhukutnatika を正しく区切って表記。
- 60) 校訂テキストの sānukheri を正しく区切って表記。
- 61) 校訂テキストの manukheri を正しく区切って表記。
- 62) 校訂テキストの sakasēṅṅpta では意味がとれない。OJED の引用例 (sēḍēp, p. 1726) に準じて読みを修正。
- 63) 校訂版 Mbh には含まれないが、一部の写本 (D (1, 4) および K (2, 4)) では Mbh 14.96.15 の後に膨大な数の偈が続いており、その中に、本偈と同一のものが見つかる (nos. 2458–2459)。Skandapurāṇa 1.2.46.97 も本偈と一致する。
- 64) 校訂テキストが loka- を前の語と分かたずに表記しているのを修正。
- 65) Cf. Mbh 3.181.35:
 dhanāni yeṣāṃ vipulāni santi nityaṃ ramante suvibhūṣitāṅgāḥ /

teṣām ayaṃ śatruvaraghna loko nāsau sadā dehasukhe ratānām //

Mbhの異読注によれば、南方版は共通して、本偈と同じく *suvibhūṣitās ca* と読んでいる。

66) OJED の登録 (hīnan, p. 631) に準じて i を長音表記に修正。

67) OJED の登録 (p. 1370) に準じて u を長音表記に修正。

68) Cf. Mbh 3.181.36:

ye yogayuktās tapasi prasaktāḥ svādhyāyāṣilā jarayanti dehān /
jitendriyā bhūtahite niṣṭhās teṣām asau nāyam arighna lokāḥ //

prasaktāḥ の箇所を本偈と同じく *prayuktāḥ* とするのは、南方版および一部の北方版に共通する。

69) OJED の登録 (p. 2047) に準じて校訂テキストの *tuhagaṇa* を修正。

70) Cf. Mbh 3.181.37:

ye dharmam eva prathamam caranti dharmeṇa labdhvā ca dhanāni kāle /
dārān avāpya kratubhir yajante teṣām ayaṃ caiva paraś ca lokāḥ //

71) dharmataḥ 及び dharmata は OJED に登録されていない。ここでは偈の dharmena の意味を正しく理解した古ジャワ語解説者が、サンスクリット語の dharmatas (“according to law or rule, rightly, justly”) で言い換えていると推測して訳しておく。

72) 校訂テキストは複数箇所 *yajñā* と語末を長音にしているが、サンスクリット語の原形及び OJED の引用例 (*dewayajña*, p. 399) に準じて、*-yajña* と修正 (他の箇所も同様)。

73) Cf. Mbh 3.181.38:

ye naiva vidyām na tapo na dānam na cāpi mūdhāḥ prajane yatante /
na cādhigacchanti sukhāny abhāgyās teṣām ayaṃ caiva paraś ca nāsti //

74) Mbh の偈にはない *kratu-* は、直前の第281偈後半部の表現の影響をうけて伝承過程で紛れ込んだのではないかと推測される。

75) 校訂テキストの *ginawayakanya* を修正。

76) Mbh 3.80.33 と完全に一致する。なお *Raghu Vira* は指摘していないが、MSS 124 及び *Padmapurāṇa* 1.19.10 も同一である。

77) サンスクリット偈の *tīrthaphala* に関して、古ジャワ語解説で *tīrthayātrā* というサンスクリット語を導入して丁寧に解説しているのが注目される。

78) Cf. Mbh 3.80.39:

anupoṣya trirātrāni tīrthāny anabhigamya ca /
adattvā kāñcanaṃ gās ca daridro nāma jāyate //

Padmapurāṇa 3.11.18 は第2句で *tīrthābhigamanena ca* とするほかは Mbh の偈と一致する。

79) *Raghu Vira* が指摘するように、Mbh 3.80.37 の前半と Mbh 3.80.38 の後半が本偈に対応する：

yo daridrair api vidhiḥ śakyaḥ prāptum nareśvara (37ab)
tīrthābhigamanam punyam yajñair api viśiṣyate (38cd)

なお、ほかに MSS 7388 と *Padmapurāṇa* 3.49.15 の後半が本偈の後半と一致する。

80) Cf. Mbh 3.297.59:

mṛto daridraḥ puruṣo mṛtam rāṣṭram arājakaṃ /
mṛtam aśrotriyam śrāddham mṛto yajñas tv adakṣiṇaḥ //

81) 後続の箇所と同様のフレーズを *yan tan* と正しく述べていることに準じ、校訂テキストの *ya tan* という読みを修正。

82) *tan paratu* は本テキストの *arākṣika-* よりも Mbh の *arājaka-* という読みをもとにしていることを思わせる。

- 83) Raghu Vira が括弧書きで n を補っている読みを採用。
- 84) サンスクリット偈の śrotriya 及び dakṣiṇā という専門用語、そしてそれらに a- という否定辞がついている場合の意味合いを的確に理解して補足説明していることが注目される。
- 85) Cf. Mbh 12.174.3:
 durbhikṣād eva durbhikṣam kleśāt kleśam bhayād bhayam /
 mṛtebhyah pramṛtaṃ yānti daridrāḥ pāpakāriṇaḥ //
 Mārkaṇḍeyapurāna 14.18cd-19ab は、この Mbh の偈にほぼ一致する（第3句で pramṛtā, 第4句で pāpakarṇiṇaḥ とする相違のみ）。
- 86) mṛta と pramṛta に関して Manu 4.5 は「乞食で得られた施物は mṛta、耕作は pramṛta」と述べ、多くの生物の命を奪うことになる農耕を一般の死よりも重く位置づけている。ここでは偈の文脈、及びマヌ法典の日本語訳（渡瀬 1991, p. 124）「プラムリタ（重い死）」を参考に訳しておく。
- 87) 校訂テキストは ya lwir とするが文意を解釈するのが難しい。他写本の異読に salwīr があり、正しく表記した salwīr が OJED の用例（durbhikṣa, p. 436）にも採用されていることから、読みを修正。
- 88) karaḥaṇ いう語は OJED に登録がなく意味がとれない。ここでは校訂テキストの注記にある異読を採用する。OJED の用例（raha, p. 1478）も同様である。なお、この異読では後ろに区切りあり（sadaṇḍa）とされているので、次の kleśa への言及との切れ目を正しく表す意味で、区切り線も入れて修正。
- 89) Raghu Vira は指摘していないが、Tantrākhyāyikā 2.55 は第2句以外は本偈と一致する：
 daridrasya manuṣyasya prājñasya madhurasya ca /
 kāle 'py uktaṃ vākyam na kaścit pratipadyate //
- 90) OJED はサンスクリット原語にもとづき prajña ないしは prajñā を見出し語として登録している（p. 1385）。ただし、その記述には、prājña というサンスクリット語の存在は想定されていない。ここでは、校訂テキストの読みをあえて残しておく。さらに注目すべきは、サンスクリット偈で duṣprajña- としている箇所を、前注で指摘した Tantrākhyāyikā に含まれる prājña- の意味にとって説明している点である。古ジャワ解説では確かに、愚かであればなおさら、とサンスクリット偈の本意を的確にまとめているが、全体の文脈からすると、古ジャワ語解説者が実際に参照したサンスクリット偈が Tantrākhyāyikā 2.55 に近いものであったと考えるほうが自然である。
- 91) Cf. IS 6795:
 santo 'pi na hi rājante daridrasyetare guṇāḥ /
 āditya iva bhūtānām śrīr guṇānām prakāśiṇī //
 Raghu Vira は指摘していないが、Pañcatantra 2.93 が上記の IS の偈と同一である。これまでの偈で daridra を取り上げてきており、古ジャワ解説も冒頭で daridra という表現を用いていることから、IS の読みの方が本来の伝承を伝えていることが推測される。
- 92) Raghu Vira は指摘していないが、Tantrākhyāyikā 2.56 が本偈と完全に一致する。なお、SS 第288偈が Tantrākhyāyikā の1つ前の偈と同一であることにも注目（注90参照）。また、Raghu Vira が指摘するように IS 2226 もほぼ一致する ::
 caṇḍāś ca daridrāś ca dvāv eva sadṛśau mama /
 caṇḍālasya na grhṇanti daridro na prayacchati //
- 93) Raghu Vira は指摘していないが、Bhaviṣyapurāna 4.171.8 が本偈とほぼ一致する：
 ahiraṇyam adāsikam alpānnājyam agorasam /

grhaṃ kṛpaṇavṛttīnāṃ narakasyāparo vidhiḥ //

MSS 4108 も一部の表現は異なるが、同じ趣旨を伝える：

ahiranyam adāsīkam grhaṃ gorasavarjitam /

pratikūlakalatram ca narakasyāparo vidhiḥ //

94) 校訂テキストに従ってそのまま訳しておくが、他のサンスクリット文献（注93参照）のように narakasyāparo vidhiḥ（地獄のもう一つの有り様である）の方が意味がとりやすく、後続の古ジャワ解説でも「貧者の家＝地獄」と的確かつ明快である。

95) Cf. Mbh 12.8.24:

yaḥ kṛśāśvāḥ kṛśagavaḥ kṛśabhṛtyaḥ kṛśātithiḥ /

sa vai rājan kṛśo nāma na śarīrakṛśaḥ kṛśaḥ //

96) kṛśabhṛtya- と kṛśātithi- の前分は、Raghu Vira の抄訳のように“lean in ~”（～が乏しい、少ない）と解釈するのも可能だが、ここでは、Monier-Williams の辞書（1982）が示す解釈、“one who feeds his servants scantily” および “one who keeps his guests short of food” を参考に訳しておく。続く古ジャワ語では、後者の意味合いも理解したうえで解説していると推測される。

97) 校訂テキストで Raghu Vira が括弧付きで n を補っている読みが適切であり、それを採用する。

98) Cf. Mbh 5.105.7:

suhṛdām hi dhanam bhuktvā kṛtvā praṇayam īpsitam /

pratikartum aśaktasya jīvitān maraṇam varam //

99) OJED の引用例（lěhčn, p. 1002）では ṅ が表記されていないが、校訂テキストの読みに従う。

100) Cf. IS 3257:

na tathā bādhyate loke prakṛtyā nirdhano janaḥ /

yathā dravyāni samprāpya tair vihīnaḥ sukhaidhitaḥ //

Raghu Vira は指摘していないが、Mbh、PT にも、これらとほぼ同一の偈が含まれる。

Cf. Mbh 5.70.29:

na tathā bādhyate kṛsna prakṛtyā nirdhano janaḥn /

yathā bhadraṃ śriyam prāpya tayā hīnaḥ sukhaidhitaḥ //

Cf. PT 2.94:

na tathā bādhyate loke prakṛtyā nirdhano janaḥ /

yathā dravyāni samprāpya tair vihīno 'sukhe sthitaḥ //

101) 校訂テキストの mūlasugih を分かち書きに修正。

102) Cf. Mbh 5.34.49:

prāyeṇa śrīmatām loke bhoktuṃ śaktir na vidyate /

daridrāṇāṃ tu rājendra api kāstham hi jīryate //

Mbh 12.28.29 は後半の語順がかなり異なるが、表現内容は一致する：

prāyeṇa śrīmatām loke bhoktuṃ śaktir na vidyate /

kāsthāny api hi jīryante daridrāṇāṃ narādhipa //

103) saśāka- 単独では意味がわかりづらいが、前注 102 で示した Mbh の偈にある kāstha（木材）という読みの存在を想定すると、その形容として「śākhā のある」と理解することが可能である。他方、古ジャワ語解説では対応箇所を gaṇan（“vegetables”）と解釈しているので、元々 saśākham ではなく saśākam（śāka: “a potherb, vegetable, greens”）であったとも考えられる。

- 104) Cf. Mbh 5.34.48:
 sampannataram evānaṃ daridrā bhuñjate sadā /
 kṣut svādutām janayati sā cādhyeṣu sudurlabhā //
- 105) 校訂テキストの tandēlan および校訂注が示す異読 tandilan では意味がとれない。文脈より andēlan (“place where something is firmly established”, OJED, p. 78) を想定して修正。
- 106) 校訂テキストの uṅga を修正。
- 107) Cf. Mbh 3.246.24:
 kṣud dharmasamjñāṃ praṇudaty ādatte dhairyam eva ca /
 visayānusārīṇī jihvā karṣaty eva rasāṇ prati //
- 108) Cf. Mbh 3.200.6:
 viṣamāṃ ca daśāṃ prāpya devān garhati vai bhr̥śam /
 ātmanaḥ karmadoṣāṇi na vijānāty apaṇḍitaḥ //
- 109) daiva- はこうした文脈では「運命、宿命」と訳するのが一般的だが、Mbh が devān として神々を非難の対象にしていることを考慮すると、deva- の派生形（形容詞）をそのままに表現して「神に由来する、神のせい」と訳すのもよいだろう。他方、古ジャワ語解説では purākṛta とし、後半で述べることを先取りしすぎた感の説明となっている。
- 110) 校訂テキストで Raghu Vira が括弧付きで n を補っている読みが適切であり、それを採用する。
- 111) 注109参照。
- 112) Cf. Mbh 13.149.10:
 ṭhamānaḥ samārambhān yadi nāsādayed dhanam /
 ugram tapaḥ samārohen na hy anuptaṃ prarohati //
- なお Mbh 12.171.1 は前半は本偈と同一であるが、後半は全く異なる叙述となっている。
- 113) 校訂テキストで Raghu Vira が括弧付きで n を補っている読みが適切であり、それを採用する。
- 114) 校訂テキストで Raghu Vira が括弧付きで n を補っている読みが適切であり、それを採用する。
- 115) 校訂テキストの kaliṇanika を分かち書きに修正。
- 116) サンスクリット偈で述べられている tapas- に言及せず、「大変な努力をしているのに、さらに繰り返し行え」という、不可解な解説となっている。
- 117) サンスクリット偈では種まき・発芽という表現、および両者の関係が明快であるが、古ジャワ語の方は OJED に従う限り、ipuk の動詞は “to foster, nurture, treat with care” (p. 697)、tuwuh の動詞は “to grow, live, come out” (p. 697) といった意味合いで、それに準拠するかぎりでは、サンスクリット偈のような踏み込んだ訳は難しい。
- 118) Cf. IS 169 (= MSS 661):
 atyantavimukhe daive vyarthayatne ca pauraṣe /
 manasvino daridrasya vanād anyat kutaḥ sukham //
- なお、Hitopadeśa 1.124 もこれとほぼ同一 (vyarthayatne / vyarthayatne の相違のみ)。

参考文献

- Apte, V. S.
 1998 *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Delhi (reprint).

Böhtlingk, Otto

1966 *Indische Sprüche*, 3 vols., Osnabrück (reprint).

Bühler, G. (ed.)

1886 *Panchatantra*, II and III, Bombay Sanskrit Series No. III, Bombay.

Ganguli, K. M. (tr.)

2002 *The Mahabharata of Krishna-Dwipayana Vyasa*, 3 vols., New Delhi (reprint).

Gonda, J.

1936 *Het Oudjavaansche Bhīṣmaparwa*, Bandoeng.

1973 *Sanskrit in Indonesia*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 99, New Delhi (2nd ed.).

Johnson, F.

2017 *Hitopadeśa, the Sanskrit Text, with a grammatical analysis, Alphabetically Arranged*, London (reprint).

Kangle, R. P. (ed.)

1969 *The Kauṭīliya Arthaśāstra, Part I: a critical edition with a glossary*, Bombay (2nd ed.)

Mandik, V. N. (ed.)

1992 *Mānava-Dharma Śāstra*, 3 vols., New Delhi (reprint).

Monier-Williams, M.

1982 *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford (reprint).

Olivelle, P.

2005 *Manu's Code of Law: a critical edition and translation of the Mānava-Dharmaśāstra*, Oxford.

Raghu Vira

1962 *Sāra-samuccaya, a classical Indonesian compendium of high ideals*, Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures, Volume 24, New Delhi.

Sastri, R. A. (ed.)

1940 *Pasupata Sutras with Pancarthabhashya of Kaundinya*, Trivandrum.

Sternbach, Ludwik

1974–2007 *Mahā-subhāṣita-saṃgraha: being an extensive collection of wise sayings in Sanskrit*, vols. 1–8, Hosiapur.

Sukhtankar, V. S. and S. K. Belvalkar (eds.)

1933–66 *The Mahābhārata, for the first time critically edited*, 19 vols., Poona.

Tripathi, S. (ed.)

2008 *Pañcatantram*, Varanasi.

Vyasa

1895 *Brahmapurāṇam*, Anandashram Sanskrit Series 28, Pune (PDF).

1998 *Garuḍapurāṇam*, Varanasi (reprint).

2007 *Padmapurāṇam*, Chowkhamba Sanskrit Series 124, 6 vols., Varanasi (reprint).

2014 *Skandamahāpurāṇam*, Chowkhamba Sanskrit Series 156, 7 vols., Varanasi (reprint).

Zoetmulder, P. J.

1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.

安藤 充

2018 「古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(1)」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第33号, pp. 117–137.

- 2019 「古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(2)」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第34號, pp. 141–167.
- 2020 「古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(3)」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第35號, pp. 159–183.
- 2021 「古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(4)」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第36號, pp. 183–205.
- 2022 「古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(5)」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第37號, pp. 85–113.
- 2023 「古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究(6)」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第38號, pp. 141–169.
- 工藤 順之
2014 「(Mahā-)Karmavibhaṅga 所引經典類研究ノート(4): Nandikasūtra, Devasūtra 追補」『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第17号, pp. 487–496.

渡瀬 信之(訳)

1991 『マヌ法典』中公文庫.

【電子情報】

Bhaviṣyapurāṇa

<https://www.wisdomlib.org/hinduism/book/bhaviṣya-purana-sanskrit/d/doc1280202.html>

Brahmapurāṇa

https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_brahmapurANa-1-246.htm

Kūrmapurāṇa

https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_kUrmapurANa.htm

Liṅgapurāṇa

https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_liGgapurANa1-108.htm

Mahābhārata

<http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.html#MBh>

Mahāsubhāṣitasamgraha, verses 1-9979

https://people.math.osu.edu/rao.3/utf/msubhs_u.htm

Manusmṛti

https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_manusmRti.htm

Mārkaṇḍeyapurāṇa

https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_mArkaNDeyapurANa1-93.htm

Padmapurāṇa

<https://www.wisdomlib.org/hinduism/book/padma-purana-sanskrit>

Pañcatantra

https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_viSNuzarman-paJcatantra.htm

Skandapurāṇa

<https://www.wisdomlib.org/hinduism/book/skanda-purana-sanskrit>

人間文化 第39号

Śukasaptati

https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_zukasaptati.htm

Tantrākhyāyikā

https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/corpustei/transformations/html/sa_tantrAkhyAyika-1-2.htm